

校長先生の初恋物語

第67話 愛が背中を押している

とっくんは、気が弱い男の子です。5年生になったときは、同じクラスに仲のいい友達が一人もいなくて、最初は一人ぼっちでした。自分から新しい友達に声をかける勇気なんて、でませんでした。教室の中で、ぽつんとしていて、ダンプさんが声をかけてくれるまでだれともしゃべることができませんでした。とっくんは、自分には、勇気のかけらもないんだと思い込んでいました。でも、それがどうしたのか、今では学級委員をしています。クラスのリーダーになっています。学級委員になったら、勇気を出さなきゃいけないことがたくさんあって、それらすべてができるようになっていきます。

とっくんにもあったんです。勇気。とっくんの心の中にもあったんです。勇気。どんな人の心の中にもあるんです。勇気。そして、その勇気があるってことに気づかせてくれたのが、ダンプさん。よしこさん。ちん君。足長君。きんに君。コージ君。きのこ君。それに、きのこ君に水を掛けるというとんでもない勇気を見せてくれたジャイアン。そして最後に、今とっくんにバトンを渡してくれた、大好きなアマーラさん。そう。友達がいたから、自分の勇気に気づけたんです。友達が、勇気を見つけてくれたんです。

自分には勇気がある。そんな自信を持ちながら、とっくんは走っていました。

走りました。体の中にある全ての力をつかって走りました。いつもより、体が軽くなっている気がしました。まるで誰かが、背中を押してくれてるみたいです。後ろを振り向くわけにはいきません。今は走るだけです。でも、振り



向いたらきっと、そこには、今までとっくんを支えてくれて、勇気に気づかせてくれた仲間がいるはずです。



前だけを見ました。目の前にはきのこ君が見えます。次の走者はきのこ君です。きっと後ろの走者は迫ってきているはずです。少しでも差を広げないと。少しでもきのこ君を助けてあげないと。そんな気持ちで、走りきり、きのこ君にバトンを渡しました。

きのこ君が走って行きました。とっくんはそのままたおれこみました。

足長君が、来てくれました。たおれたとっくんに手をかしてくれました。とっくんは足長君に支えられながら、立ち上がりました。すると、足長君が、こう言いました。

「すごいぞ。とっくん。後ろの走者は、ぜんぜんとっくんと差を詰められなかったよ。がんばったな。」

にっこり笑う足長君。足長君は、恋のライバルだけど、まぎれもなく、とっくんの大親友です。

「足長君、ありがとう。」

とっくんはお礼を言ったあと、きのこ君を見ました。きのこ君はがんばっていますが、大変なことになっていました。2組の大ピンチがここから来てしまいます。

つづく

次回予告 泣くなきのこ君